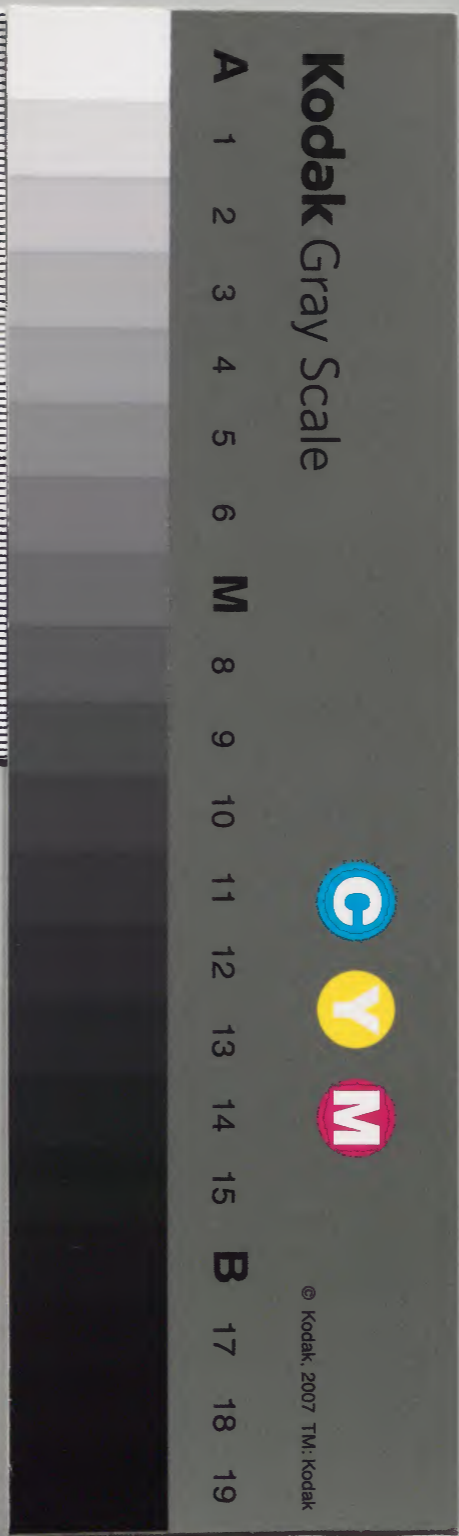


鹽尻

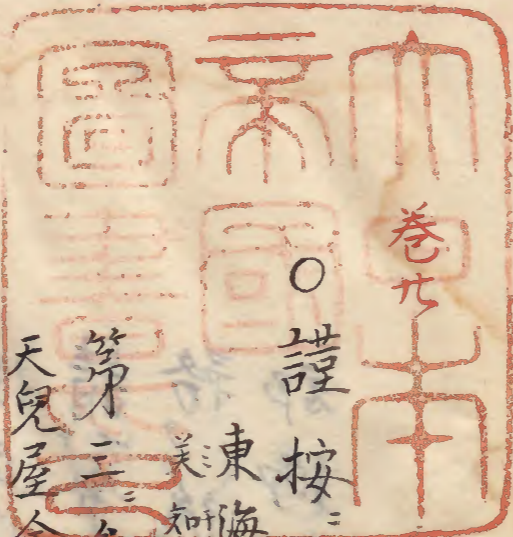
和書門			
二五	一九	〇九	號類
一〇	六	函	
六〇	冊	架	

庫文閣内		和書	
二五	〇九	號類	
一〇	六	函	
二四	冊	架	

内閣文庫	
番號	和 25109
冊數	60 (26)
函號	211 307



八ノ上



○謹按尾張國列東海道

東海ノ名セツ日本景行紀訓

第一^{美知}矣古昔神武天皇東征之日天^{タケノミコト}種子命^{タケノミコト}
天兒屋余孫討海部^{ウミベ}佩室^{イハムロ}臣定國^{イサノクニ}
見延長風土記

成務天皇ノ五年以小豐余^{オトヨノミコト}

天火明余十世孫尾張ノ連祖其ノ廟有イ愛
契田ノ郷一号ニ上テ竈ノ神社ト

為國造^{クニツクリ}後世ノ國司也 縣邑各ノ置楯置^{イナキシ}

後世ノ郡司也 因分郡縣ヲ定邑里^{ハチ郡蓋}

自此尾張氏世為國造^{クニツクリ}天武天皇ノ御宇

以^イ小子部^{コイサ}連鉏鈞^{ムラシ}任守^{スカミ}

按^イ大宝令^{タヘタテノミコト}守一人從五位ノ下^{スケ}今一人



朽木文庫

從六位ノ上掾一人從七位ノ上目一人從
八位下史三負博士一人學生四十人

府本在中嶋郡

今郡有國衛ノ庄松下村即司館ノ旧跡
而俗呼ヲ曰國衛

守今等館於此治政施ノ教ヲ後鳥羽院ノ

御宇前ノ右大將源賴朝及テ為都元師ト

請命別置守護一人以並司執國

務後世武臣自立不待官命而私領

郡御如斯波氏織田氏數家

日本書紀

斯波氏領國之際遷侯官於同郡清洲

今為春日井郡建城武衛源義統之時其臣織

田彦五郎某弒義統奪清洲城自

此織田氏專國後贈相國信長住於此

其子前内大臣信雄又居此然前内白

豊臣秀次領以之後福嶋左金吾正則

利任守

後陽成院慶長五年

東照神君封從三位前左近衛權中將

源忠吉卿侯官情洲城

同十二年前權大納言御諱襲封豫大城

於愛智郡那古屋庄遷于侯官初今川
左馬助源氏豊範之織田備後守平信秀
奪之天文中信長居之後使林佐渡守
監之然後平岩生計頭少朝臣親吉
領之至此敬公始移居寧先此神君
幼子千君来尾州為平岩氏之嗣然
慶長五年庚子三月七日早世也号高岳
院

○尾侯

忠吉卿

神君男也母宝臺院一品夫天正八年

庚辰生号松平下野守
後住薩摩守

文禄元年壬辰二月十九日賜武州忍城ラシノ

慶長五年庚子封尾州六年辛丑三月二十

九日侍從從四位下

十年乙巳四月十六日從三位左近衛權中

将

十二年丁未三月五日薨武府一享年二十

八号性高院憲堂玄白公

忠吉卿在清洲

敬公諱義直忠吉卿仲氏母志水加
賀守菅原宗清ノ女

慶長五年庚子十二月二十八日生攝州大坂

始義

八年癸卯正月封_ス甲府君

十一年丙午八月十一日元服

同日右兵衛督從四位下

十二年丁未閏四月二十六日封_ニ尾列_一

十三年戊申八月二十五日受_ニ封_一印_ヲ

十六年辛亥三月二十日參議從三位兼_ニ右近_一

衛權中將

元和元年乙卯四月十二日要_ニ藝_一侯源_ノ

孝長_ノ女_ヲ

三年丁巳七月十九日權中納言正三位

寬永三年丙寅八月二十日從二位權大納言

慶安三年庚寅五月七日薨於東都壽五十一

葬_ニ于尾城良應夢山_一謚_ニ敬公_一祠_ヲ号_ニ

建中_一治世四十八年

正公 諱ハ光友敬公長子生母歡喜院吉田氏

寬永二年乙丑七月二十九日生_ル尾府_ニ始_ニ光_一

七年庚午五月三日元服

同日從五位上

十年癸酉九月五日右兵衛督從四位下

十六年己卯九月二十一日娶_ニ贈太政大臣

家光公_ノ女_ヲ

十七年庚辰三月四日右近衛權中將

同日參議中將如元

同年七月十一日從三位

慶長三年庚寅六月二十八日嗣封

兼應二年癸巳八月十二日權中納言正三位

元祿三年庚午九月四日權大納言

同月十一日從二位

六年癸酉四月二十五日致仕

十三年庚辰十月十六日薨於尾城ノ東

大曾祚ノ別邸壽七十六

同月二十八日葬於德興山謚正公十六祠号

瑞龍十

法号天蓮社順譽

治世四十四年

誠公諱八綱誠 正公長子母贈相國

兼應元年壬辰八月二日生于東都

七月初一日 改綱誠

明曆三年丁酉四月五日元服

同日右兵衛督從四位下

寬文三年癸卯十二月二十七日右近衛權中將

同日從三位

七年丁未九月二十六日娶權大納言源忠幸

卿ノ女

元祿四年辛未三月二十六日 参議中将如元

六年癸酉四月二十五日 嗣封

同年十二月初一日 權中納言

十二年己卯六月五日 薨_ス東都市谷ノ館

享年四十八

同月二十四日 葬_ス於德興山 謚_ス 誠_ト

福号以恭心 法号正誉徽應

治世七年

公 御名吉通誠公ノ御子生母坂崎氏ノ女

元祿二年己巳九月十七日生_ル於東都

八年乙亥十二月四日 元服

同日右兵衛督從四位ノ下 大樹殿下 賜_フ名_ヲ

於吉通_ト

十二年八月己卯七月十一日 嗣封

同年八月十三日 右近衛權ノ中将

同從三位

○大明一統使覽云 北直隸八府戸四十一万八十七

百八十九口 三百四十一万三千二百五十四人

南直隸十四府戸一百九十六万二千八百一十八口

九百九十六万七千四百三十九人

此南北二京ノ戸口也其十三省ノ戸口今略ス之
○我日本平安城洛内ノ戸四万七千口五十七万七千
五百四十八人是延宝九年九月所數其洛外
又殆足與之相比况朝延宮家武家多キ
非斯ノ限又吾尾城下市井ノ戸六千六十二口
六万三千七百三十四人是元禄五年九月所
數也

○我尾東濃戸村の窯器とて其口布某の制也
——と上志とて或人曰吾口布——と
略称なり加菱四布と云ひ——永平と
宗山道元入室の時も——と異邦のり

○磁器の制とて其口布——と
春慶と号せしと云

或と泉州堺の人なりと云り

○點心 出唐史鄭修之夫人之言唐ノ時
俗語也

○媪

倭俗に子腹氣あり 唐の崔令欽、教坊
記に云く

○人間郡克夫人有潔病何也克夫曰胃中
滯礙而多疑耳未有人夫生如此也初因
多疑積漸而日深此亦未為害但疑心
既重則万境皆錯最是害道第一

事不可不知也 道山漬話

倭俗きれ、いさくと云ふもの、潔病あり
實に疑心より生ず

○ 堀正三位右近衛ノ中将攝ノ御后正成墓

無原よりあり元禄四年

水戸ノ源義公碑と建く、銘を録し

たまし

右接隣の名不書きる物の才より一二を

抄し遺忘を備ふ

○ 元禄辛巳の四月より 洛中と下ともあり

陀螺と玩心作、吾尾城下り又もてん

侍もいそ九圍の北と童子なるもそのあま
申ありとす長濟人と珍しとも侍
よけ外祢んりとも稱しと誤計と地よ
うらまきと拵よりちとありともとま
投壺の變りやこのと海京やちと
投壺しと珍多し

○ 辛巳六月廿日の朝まじり起り京師暴風

迅雷しと凡、京中みすにみ所一時

は落し院の御門二条の城中ちり

も落し人も死にたり洛外もまじ

所は落し京師に生れたる民が雷火

もろく焼值り者りともろく分半ハ
傳人者りともろくありともろく
ろろろろろろろろろろろろろろろ

○明水陸程限備覽ノ二日自熬断立極
三才奠位黄帝疆理南北堯命禹平
水共分天下為九州五段舜分テ為十二

州ト云 下文
一云畧之

秦ノ三十六郡漢武帝為十三郡哀平ノ
除タ三十六侯國二百四十光武侯國四百餘
所晋分二十九道一唐為二十道一宋有
四京二十三路元十二省十八道明二京

十三省清改北京一曰盛京一改南京為江
南一曰江寧府一十三省一依旧不改ノ之人民
悉遵北方滿州之俗一大改觀明人笑
我近世剃頭然今清人皆剃髮而僅
留顛髮東西時俗有京運然乎

○又曰朝ノ名公多厄於六十六韓思猷歐陽
文忠司馬温公王荆公糞翰林而秦師垣
亦然云揚万里
云揮塵錄

我國自中世以四十二為厄年一是畏之ヲ世
継物語亦謂之東見記云四二之意也
死ノ字ノ倭訓四二也故忌之本無其據耳

拾芥抄所載厄年有_二四十九太一定分厄
有_二四十五而無_二四十二適_一雖_レ日者陰陽之書
有_二此事君子所不_二敢拘忌也夫禍福有_レ命
孟子所謂_レ致壽不_レ貳者_一學者其察_レ之
見_レ欺_レ妖巫實僧_一苦_レ拍忌_レ者_一不足_レ謂_レ
季_レ耳

○かみの文字をくくれば源氏枕及紙七依日
記なと先達とくく傳るとはたきも志は
申さくともめをきくともく
あはれ女父のこくはるる名阿の
人志くぬおれく記たまふと漢字の

とくくあはれくく情より記と折ふと
とりませくく記たまふとあつとくとい
とくくへ傳る

○命長またりよりの次彭祖をいあめ
以_レ年彭祖補道の術を尋しり付
之代を歴しも四十九人の妻と喪し
み十四人のあ伐失ひ者もくを志くは
然とすくくも長あらんり彭祖は
又君よ幸せくく申漢の董賢の如き
父子親屬皆_レませら_レ死_レ然もくもく
自殺し一時く家亡し申前漢書ノ

傷幸傳よんくう一旦祿位をゆそのち
 何とあくぢりあんこく又人杯うんや史
 秦政う六國を合く天下ととり人らの
 欲を極メしも終又万世の戮ハツカシとらさる
 きのさるり天子うく蜀は海をたし川
 沁るも夏とあけりいんや灸綫孤獨の
 才胡露風葉の命あまをとり期し何
 事とく祚うん志う心頭煩ひさして
 閉るんは空イダシキヲ當世ノ用一袖キヲ看人
 此半瓶の溜は喜風暖あり

○八陣

魚鱗 鶴翼 雁行
 彎月 鋒矢 衡軌
 長蛇 方圓

異孔明八陣是大江維時自異朝所傳來
 也出干訓閱集

○の陣の字は詩の雲漢はわく九傳も
 見えたり大の陣とつよち伝ちのそちり
 ちやされと皆經傳の字ととりて書き
 見え大陣の字も又左傳僖公二十八年の
 とらり見えたり

○日本書紀多々拾綴淮南子三五曆記月令

正義等ノ之文一以明開闢之理且用史記漢書文選等之字以和訓附之今記其

一二

天地未割陰陽不分

淮南子三天文訓天北未割陰陽未判

四時未分万物未生

○北越山本廣足と云いし人始浮屠の後

ありたるをいひ之を東漢して學問

の勅もいと何さくさりしかれと云う

時讀も

そのつらむと云ふものにてたしむる

行ふはまじき事なれどもある

悔ひる事ありては悔ひてめぐる事ある

いふ度會の延昌神皇の法あり

○足利家明朝よりくられ表は彼國の

年号を用ひ且臣の字を書して又自

日本國主と稱せし事ありて不可

なり吾隣國家記よけるを強し作り

きりけふも理りとる之傳り今の俗儒と

い等の名分をとるをな

法人、我國の樹を海棠と云ふも傳り
○慶會ノ延昌神主ノ曰神代卷ノ直指抄其説ハ
好所多し但し何人の述もるや古也とも
不見思つ川多書もたしあぬやと云
己也にとも多し傳り

○筑前玉香排宮毎年正月七日の人
と云く鬼と稱しと云くもや
傳りと里のちゆなりと云く是を云う傳り
よはそを初もわく武内大臣の社此初
うめを傳りぬ是異穢降伏の事あり
と云く一説は追儺の送法ありとも云

同玉郡珂那住吉の社も正月七日鬼平め
なりと云く人伝捕と鬼と一是を追ひ
くちて終りよは石の板よ志あり付あり
傳りしよ今はきまへる板むり
社前の志れ方よとあり
けり信多ありし今も新傳し傳り
と云く梅もるに寧波府志より天妃宮とま
はる人よと云く昔日我朝の人と云く
難よあひるより之傳り南方ハじし
より巫風盛なりと云く
淫祀と云く傳りし時代久しかり

ラニライラテ

しぬをさしきしにぬすくは退く人侍り
もんどのぬか齧きら不河りてすし
時よあまらる人のあわくをさすし
かとしつちいそ思よはさあ

○ 菟花 小あえ高廿二尺、石さき三月は葉花と
開花の花のあはぬり花神
あは花落く後をすす花を毒河り
喰あへく次世俗をを造く紫荊樹とす
紫荊樹とスハツまこけ物よ河り
○ 紫荊樹 春らぬりり紫の花と一和
よ危多し河りり河りり花神と時多る

花史曰こゆすことと好く水と切る根の
くまに枝をけ次長大あるとき介ら
くあへく又曰そ花毒河り人と殺す

○ 三危 説林
少徳而多寵 才下而位高
無切而厚禄

○ 書を解する人大意を不着只句と逐て
解さゆへう意却ら不貫と朱子の
まひし字者文字を解とはを書の大意
とく着く可解事肝要なり又
故事とのと求く通理を印よ河り人

と問ひけり事とありすやんせくと
子拾遺集なるもの物終しやんあま
る祢好忠

家...のむしひ...
ふとせとよもたまくとくへき

右衛門督の友やがの歌合の時此歌
ありとくや

○五雜俎曰官官之尊貴者趙高為中丞相
龍澄樞為内大師然曰中曰内猶所以別
於廷臣也云

按吾邦内大臣中納言其始中内之官

也後世皆為廷臣之頭官故昔日撰今之
日不載内中之官

○正徹三夕の歌を吟しそもいりるらん

あまれもあまなくやまれらん
くさくさ世の秋の夕ぐさ

いゝあるるとり物ひん

○張良韓のためは鯨言と報せし事とをり
し...謝天運も子房...淡と遊ん
志...も晋...ひく遠は劉裕
心へそ官詔を受へは却る異志
名をゆりいづく他良志...

涅槃經筆受の補助せしむるは、
ありとありなり。通過経目謝天運有。一
誅せしむる事一たまはる書法。是は浮屠の
知る所ありんや。

○ 振樂の伎うねを倡優の聲曲に比し、
記交のありく放張なり。次は、
教伐の声あり。今の音樂を振樂に比し、
又、
を、
し、
の樂も異邦といへども、其傳を失せり。況

○ 我國に、
季れ、
わ、

今世に、
なり、
に、

○ 房中の、
新組は、
この、
うや、
仰り、

戯とく人信と私し侍り私漢とよ季
せよは河女事とも記して道徳は日く
いし〜成りあさ〜

○ 茲撰法師我の所の如し

その有り〜んもの言の書し

い〜りの私れ仲よ〜りも
け分續古今よ入るさ〜り〜要後ありしを
為字卿貫之の筆じ〜り〜せんも口とし
さ〜り〜此ぬや〜れ書き〜入〜り〜り〜が
為兼口玉系集よ入た〜りよ〜り
○ 蠅と鼠とぬと害と故〜人老を少む利を

嚙と私つ〜り〜侍と短り〜癩と〜
魚〜り〜蠅よ〜り〜文と兼〜
馳駢所仍〜り〜命と好〜り〜鼠よ〜り
〜り〜人〜り〜却〜り〜
〜り〜南宋正學と儒學と〜り〜奸
邪と君子あり〜り〜人君の不明
よ〜り〜

○ 秘傳問答ハ未足の所有り〜り〜

陽後記正〜り〜

○ 今川左言女氏豊といひ〜り〜尾州岩古倉
の城よ〜り〜織田備前と〜り〜

傳習の説は異ありしや

○ 学者欲ハ觀ニ中庸之書ヲ則須首近思存養一篇也

○ 秦ノ始皇相と封しそちましく漢ノ武帝

柏と大將軍と封し唐ノ武后も亦柏と

不恥ち更に封し五雜俎台胡延壽帝語を

公位よるしりつ日の説ありし

官爵ハ名分の大イり侍ものよりて玉家

乞より守りたるは徳は河に侍

人多るは廟より可あり此や名分の樹

下位と河に位とより何だましき

後世の人君己よりたよりしし
高爵とありて遜りてはよりしりれ牙
亡りたりたよりしりなりす

○ 馬子崇峻帝と絨し伊周苑山院と射

徒せし色よりハ名教めしりありしり

よりこれ我邦の学名なりと筆

しりて罪を誅せりも入道学何

ありし故に近世ハ略名分と辨し

百人の北と志る人多しり人とは非

尺々と以て知しり色に正しり

より色よりこと記す

書よ及くたり又小邸の文觀の流もかた
半しとし今ハ又これ等と神社の祖友お傳
しつゝ秘藏し傳りつゝ

○ 對馬國下縣郡阿麻氏留神社山城國葛野
郡天照御魂ノ神社

是天照太神より天孫降臨のとき
供奉ノ神天ノ男神命也

壹岐國月讀ノ神社及山城國葛野月讀ノ
神社

是亦月讀ノ言に何れも天孫供奉の月神
命也淡嶋の社司紀如尚り況るり名の

月と云ふ所舎らる事あり

○ 朱子山北紀行大賢遊覽之興感慨之心發
於言示人其性情正學者所須玩享

○ 橘ノ季茂古今著聞集其ノ神祇篇怪異
とのこ伝せり政道忠臣の篇が

たきり物色も道志ぬ人のをあらわ
らぬ事ともいみじ

實功のい川りて閉門せり事匡房
の非乃よれれとも船は流し

事ありしをいしに

○ 姓氏録より天といひ日

○ 以ハ或ハみこしつろふハ上世韓國我邦
ともいふに西称せしむるなり

○ 可憎 元僧栢子庭

世間何者最堪憎

虱蚤蚊蝇鼠賊僧

船脚車夫并晚母

爆炭 湿柴 水油 燈

○ 大政大臣憂之 欲使太子

辭讓 是時藤原ノ三位仁善大文ヲ諫テ大臣曰懸

象無ニ變事必不ニ遂ニ享ニ愛ニ帝召シ信ト大臣ヲ

清談良久乃余以下立ニ惟喬親王之趣上信ト

○ 大臣奏ノ日太子若シ有ラ罪須ニ廢ニ默更不レ還立

若無罪亦不可レ立ニ他人ヲ臣不敢テ奉詔ヤ帝甚

不レ悅事遂ニ無レ變ニ無レ幾帝崩太子繼レ位云

見ニ羅山文集二十六ニ

○ 稻麥の莖葉を家のしとくはくまきし和信よ

しとくみとくし三才圖會と云ふなりしに

けおあり瘦ユの字と書しあり

○ 人牛ハヤ室ハヤ空ハヤもけし者よ長脚鑽ハす

すすおおハはくわしと鉄扒混ニ天ニ戮ハひゆり

のしとくよんくゆり

○ 妙見者北辰ノ名也云ニ七佛所説神咒經ノ力ニ

○佛說七俱眠佛母准提大明陀羅尼經

私曰曾聞天主之徒有鏡中現異形者即
竺土之風歟又我邦有鏡影皆此類歟點胡
以幻術惑人如此

○佛說陀羅尼集經十有大青面金剛咒法及畫
五藥又像法

俗為庚申之本尊者而無一言及庚申
者也

○同十二佛說莊嚴道場及供養貝支料度法有
以金銅鈴帶四十八道大鏡二十八面小鏡四十面

○置道場之說

○區廬 漢書註衛士之屋謂之區廬

按日本番所也

區士 宿衛宮外士稱為區士

○くまの也異邦の銀邊行と云ふ

陳元贊口語

○アツタノハ 造加於劔七柄為八劔宮也

アツタノハ劔宮トシ

○光明后置浴室 臣慮入於其内自亦入此而

恐淫察人訾譏已而託以佛瑞然此

万世不知其真乎事文類聚有晋李李

之妻淫^ニ外人^ニ使^ム其人^ヲ裸^ニ解^キ髮^ヲ為^シ鬼神^ノ欺^ラ李^子禾^子今^ル浴^レ之^事上^ニ噫^シ聖^武之昏^愚見^ル欺^ニ奸^后而^建寺^ヲ終^ニ身^ヲ不^レ察^ス之^ヲ曰^ク之^ヲ聖^曰之^武其^ノ号^豈不^ニ虚^文一^ト嗚^呼

○日蓮黨所^ル山^ニ七^面明^神者^ヲ甲^川身^延久^遠寺^ノ鎮^守也^ニ七^面者^身延^山ノ一^峯名^也七^面ノ縁^記為^シ巖^嶋神^ト又^為無^熱池^ノ神^ト然^ル其^實辨^才天^女也^不見^ル日^蓮之^録内^外ノ書^及註^書讀^未流^以下^在身^延山^ノ神^祠上^ニ故^ニ託^事於^日蓮^而為^シ附^會故^妄之^説一^ト惑^ス人^ヲ

○文明十七年九月八日於尾州清洲城^ニ大^追物^ト

城主織田備後守
平放信朝臣

梅花女^ノ花^ノ二^ハ人^ノ傳^ル

○薛文清公^ノ曰^ク在^テ古^人之^後議^ス古^人之^失則^易處^ニ古^人之^位為^シ古^人之^事則^難

嗚呼^議論^{他人}ノ長^短不^知者^警自^己可^否予^毎以^薛子^之言^三復^ノ乎

○閑情小品曰^讀未^見書^如得^良友^見已^讀書^如逢^{故人}

○困学紀原曰^龜山^誌游^執中^曰嘗^以畫^驗之^妻子^以觀^其行^之篤^与否^也夜^ハ考^之夢^定録^{以下}其^志之^定与^未也

夫学、者修身之事耳。季誠カ之所謂篤信、
好學、守死善道、吾輩ノ八字、歳者實不可
緩也。

○西湖志 管蔡要、西湖ノ圖をのせ、傳、湖のまはり
の山岳大、ち、院、多、我、邦、仙、寺、の、い、り、
け、し、く、も、等、し、き、し、り、

○清本ハ、汲古閣板、く、く、く、比、通、志、壹、い、と、
清、く、く、く、て、文、字、を、あ、ら、り、し、し、し、肆、い、へ、り、

○竹生嶋チクブシマ、都久夫須麻之轉語、而假借ノ字也、神
名式、近、江ノ国、浅井ノ郡、都久夫須麻神社者、今、
竹生嶋也、奈、市、持、嶋、姫、江、磨、夏、年、女、天、女、
フ、ト、カ、

○信夫シノブ、庄司藤原ノ元治モトハル、
是、佐藤庄司、而、嗣、信、
志、信、ノ、之、父、也、
○名古屋ノ城、之、今、川、丸、手、助、氏、を、今、川、氏、元、
之、中、之、

○八雲御抄ハ、クモ御抄ト讀、へ、し、と、也、

○宇佐八幡宮三所、
應神天皇、神功皇后、玉依姫、

石清水八幡三所、
應神天皇、姬大神、神功皇后、

○右見八幡愚童訓、
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、

見、南、蛮、小、白、鳴、鐘、

○摩多羅神 溪嵐拾葉集曰摩多羅神者即

摩阿迦羅天也亦名麻手密神云

神像按比叡山常行堂一左ノ手執鼓右ノ手

執藁荷

○博古圖漢鑑有六花鑑

唐鑑有八花鑑

按吾邦所謂八花形鑑者蓋唐八花鑑

也真野時綱云八咫者八頭也頭也

邱之謂而八之字畧スレ也

○綿花をまきこといふ唐も本と當年と

二待河より綿ハ本あつて何のそと

毛ハ胡椒に似たりとや昔の綿ハ

アトヨリ草もいふ

子ヨリ梵語ニ都根とも迦波羅とも

通鑑

梁紀の史姑釋文及ひ大守衍義補輟

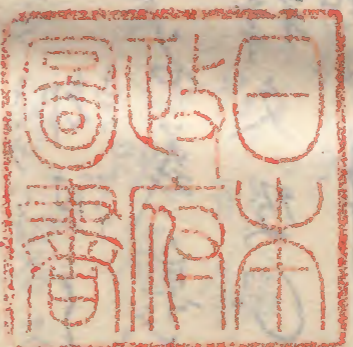
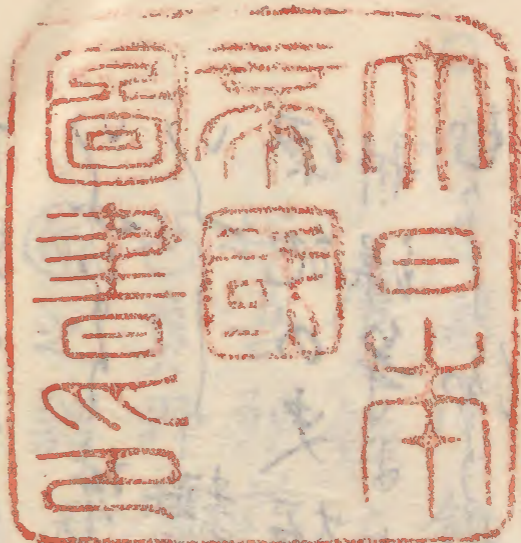
耕深等よ本綿の本といふ

ひいし

黒邦より又タあり

百九十九殊信の部よ綿種と崑崙命の人

より



Handwritten text in seal script, including the name '李鴻章' (Li Hongzhang) and other characters, likely a signature or official stamp.

日本書紀
卷之八

天武天皇

